
夢日記物語

雑草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢日記物語

【Nコード】

N2129S

【作者名】

雑草

【あらすじ】

夢を文章に起こしただけの短編集。一話完結。

あくまで眠りの中で見る夢なのに、何故か主人公は色々。

いつか物語りになるのかもしれないし、ならないのかもしれない。基本的に、シリアスじみているかもしれない。淡々。

更新は亀足。

ゆがむ町

ああ、なんでだろう。

この道は、普段歩くような道ではないけれど。

森とも呼べない森を抜け、小さく鬱蒼とした川を渉る。

そこは住み慣れた町の中には違いがなく、覚えるというほど通ったことのある道ではないけれど、それでも通れば「ああ」と思う程度には記憶にある道ではある。

そのはずなのに今は、いくら進めども進めども、家に帰り着けない。

自転車を追うのは、軽い身体でも少し無理がある。

ヘンゼルとグレーテルのように、彼が残した跡を追いながら、急いで道を進む。

後ろからついてきている彼らはもう見えない。でもたぶんこれを追いかけてくるだろう。

車どおりの多い道路からそれで、田舎道へと進む。

ここから先は、道ではないような道も多い。

「友達が、ついてこない」

電話から、弟が言う。

「このまま進んで。見つけたら、こっちも連絡する」

電話を切る。目の前はもう森だ。

大丈夫。皆大人だ。自分のことは自分でなんとかする。

進む、進む。前へと。

だんだんと少なくなる白い跡と、信用するには足りなさすぎるあまいな記憶を頼りに、道なき道を進む。

ふと、気付くと前に、はぐれたという弟の友人がいた。

どうやら、短縮した道を進んできたらしい。

「弟が、探していたよ」

「ああ、そう。後からくるんだね？」

「うん。連絡をして。なんならこっちから連絡するけど」

「いいよ。自分でする」

分かれ道。登る道か、下る道か。

下る道のほうが、見覚えがあるような気もするが、登る道も、何度か行ったことがあるような気もする。

どちらでも、帰れるかもしれない。

「私は、登る道をいく」

「じゃあ、ここでお別れだ」

もともとお互い知り合いでもないから。けれど、

「電話番号、交換しておく？」

「いや、必要なら、あいつに言ってよ」

提案は断られて。まあいいかと道を別つ。

見覚えのある道、見覚えのない道。

歩いても歩いても家に着かない。

治安の悪い一区画、高級住宅街。

狭い町の中、森に点在するようにある色々な模様のような区画を通り越えて。

ふと気がつくと、家にいた。

一人ひとりと集まって、けれど一人足りない。

「私の、知り合いがいない」

迷ったのかもしれない。帰ったのかもしれない。朝が来て、不安になる。

「あそこの家の子でしょ？行ってみて来てあげるから」

母親の言葉に安く頷けず、一緒についていくことにする。

見知らぬ道を歩いて、言われた場所は記憶とは違う。

「あっちのスーパーの所だと思ってた」

小さい頃の記憶、それからあっていなかったその人は、今はたぶん友達ではないけれど、思い出だけはあって。

気付けば古い家に勝手に入っていく母親の姿。

ああそれならば、大丈夫だろうと思ったのに。

「この町は、一晩でこんなにも変わってしまった」

いつの間にか近くにあった、見知らぬおじさんがぼつりと呟く。

「お前が、道をゆがめる。お前のゆがみが、この世界をゆがめる」

「お前が道を歩けば、その道はゆがむ。ほら、あの場所はあるところにはなかったのに、今はずいぶん奥に引きずり込まれてしまった」

だったらどうすればいい。今来た道も、なくなるのか。また、道を見失うのか。

「私は、どうすればいい」

その言葉に、返る返事はなく。

町がゆがむ。世界が怒っている。

この町を出ようと、その時思った。

太陽消滅

世界が急激に変わった。

徐々に上がる放射線量。

破壊される環境。

何かがおかしい。

そう、人々が思ったときには手遅れだった。

地下へ逃げよう。

そう決まったのはいつだったか。

その道行きの最中、大きな爆発があった。

まず、おこったのは、目が焼けるほどの猛烈な光。

そして、爆音。

数泊後に、何もかもが吹き飛ぶような暴風。

そして、灼熱。

深い海にもぐって、もぐって、それでもあつという間になくなっていく。

広い海は人であふれ、もはや海の様相を呈していない。

やっと状態が落ち着いた時には、全てが終わりの始まり迎えていたのだ。

人々が空を見上げると、そこには巨大な火の玉と、尾を引く線が空に描かれていた。

巨大な、巨大な二つの火の玉。

「太陽だ」父が言った。「火星が、太陽に衝突した」

何を言われたのだから、理解するのに多大な時間がかかった。

「でも、でも、まだ世界はこんなに明るい」

「火星が太陽を喰らって、太陽になったんだ。ほら、あの二つ目の

火の玉をみてごらん」

黒くて、大きくて、とても太陽とは思えないそれは、けれどすさまじい熱を今も地上に送り続けている。太陽とは思えない、黒く赤く、ひび割れたそれ

——あれが、火星？

太陽に感じる安心感は、何一つ感じ取れなかった。あるのは、得体の知れない恐怖感と、そしてとても嫌なイメージ。

誰もが空を見上げていた。

「……太陽となった火星も、もう寿命なんだ」

そばに立つ、父の言葉が遠く響いた。

「もう、終わってしまったのか」

それは、決して受け入れられない真実。

星の寿命というのは、こういうことを言うのか。

まさか、生きているうちにそれをこの目で見ることになるとは思わなかった。

どこかゆがんだ視界。生き残った人々は、それぞれの家へ帰った。

「今日の各地の放射線量は」

律儀なキャスターが淡々と告げる。

「こっちにおいて、窓際にいなさんな」

母の言葉にソファへ戻った。

——世界は終わる。

太陽となった火星は、もう寿命だ。その爆発に飲み込まれるのが早いか、それとも放射線で死ぬのが早いか。

どこか、ほっとする自分がいた。

これで、就職活動しなくていい。

これで、もう顔を合わせるたびにせつつかれないですむ。

やりたいことはやってきた。悔いがないといえば嘘になるが、死ぬことは別にいい。

自分から死にたいなんて思ったことはない。けれど、ずっと死ぬことを夢見てきた。全てが終われば、ようやく眠れる。もう、何も心配しなくていいのだから。あとは消えるだけだ。

「……嘘だ」

本当は、死にたくない。怖い。ただ、怖い。これで本当になにもなくなってしまうのか。

誰かの叫び声が聞こえた。そう、叫び声だ。悲痛な、悲しみに狂った声。

扉から、母が出てきた。どこか、憔悴したその姿。

「あれ、たけ？」

「そう、遺産のこと話してきた。たけちゃんに、全部の遺産が行くようにしたって」

「お父さんは？」

「二階」

「そう」

弟の、そんな声は聞いたことがなかった。

あれは、どんな感情であれ、自分を見せることを嫌う人間だから。悲痛に泣き叫ぶ彼は、死を認められないのか。それとも、家族がもうそれを認めていることが認められないのか。

もう私たちはそう遅くないうちに死ぬから。そんな声、たしかに聞きたくもない。

「……ごめんね？」

母が言う。

遺産なんて、期待していなかったし。私じゃなくて弟なのは、少しだけ不服だけど。でもまあいいだろう。あの時も今も、一番死の光を浴びているのは私だから。

「いいよ。……じゃあさ、私にも、なにかちょうだい？ お母さんが、一番大事にしているもの」

「え？」

「あ、一番じゃなくてもいい。なにか大事にしているものをちょうだい？」

冗談めかして言う言葉は、紛れもない真実。

それが一番欲しいもの。そうしたら、きっとずっと、一緒にいられるから。

悲しみのような笑顔と共にもらったものを胸に抱いて、二階へと駆け上がった。廊下の一番奥、扉を開ければ、求める姿。

「お父さん！」

いつもと変わらぬ様子で机に向かう姿に、とてもうれしくなって顔が緩んだ。

「ねえ、あのさ、なんかさ、お父さんが大事にしているものをちょうだい？」

「……いいよ」

その言葉が、とても、とても嬉しくて――。

私は――――。

あの日の親友

夢を見た。古い、古い友人が出てくる夢。

小4の時に転校した学校で、5、6年の時に初めて大親友と呼んだ相手。

6年が終わると同時にまた転校して、それから手紙のやり取りをしていたがいつの間にかそれも無くなり、年賀状を出しても彼女のお母さんから来るだけだから、そういうものだと思っていた。

今年、何年ぶりだろう、久々に見た年賀状で彼女の文字。

かわいい赤ちゃん。先を越されたと笑みが浮かぶ。くやしい。

眉毛がすこし太いところがそっくりだ。顔つきも似ている。

かわいいなあ。幸せそうだ。

私が見たのは小学校の頃が最後で、その1年後にもう一度会ったけど、それをカウントしてもまだまだ幼い頃。

大人になった彼女は、きっと眉毛も手入れして、化粧とかもしたりして。

どんなに、綺麗になってるだろう。

今でも、私は彼女を大親友だと思っている。

今会ったり話したりしても、たぶん昔のようにはいかないとわかっているけれども。

それでも、あのころ彼女が一番だった私には確かに彼女は親友で、あの頃の思い出が大事な思い出としてしっかりと私自身に根付いている今も、彼女は変わらず大親友だ。

(そういえば、語り合ったこともあったねえ。大きくなっても隣同士に家を建てて、とか)

ああ、よく覚えてるね。それって小5の頃の話なのに。

(そりゃあね)

一緒に住むぐらいの勢いだったよね。今もそうしちゃう？

(子供同士幼馴染ってのもいいよね。某漫画みたく)

ははは、じゃあ私は男の子うまなきゃならんのか。そのまえに相手もないのに……くそっ！

(あはははは、勝った勝った！そういうば、私市内に住んでるんだよ)

あ、年賀状に書いてあった。こっちは実は市内です。

(え、なにそれ。早く言ってよ)

ふふふ、少なくとも職が決まるまでは内緒なのです。

(私に言ったら意味無いじゃん)

いいんだ。

(そうだね、——これ夢だし)

そう。夢だし。ねえ、夢の中だから、ひとつ聞いてもいい？

(なに？)

あの頃、親友だったけど、喧嘩もしたし、たぶん嫌なこともあったんだと思う。……私は、そういうの忘れるタイプだから、今は楽しいしか残ってないけど。ねえ……

(うん)

あのさ、……あなたはさ、後悔してない？嫌ってない？今も、私はあなたにとって親友でいられてる？

(それは、本人に聞きなよ)

……そうだね。でも聞かないよ。大人になったんだしね。そうであればいいあと、思うだけ。きっと、そうなんだと思うから。だってさ、親友、なんだしさ。

(そうだね。またいつか)

——会えるといいねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2129s/>

夢日記物語

2011年5月10日12時10分発行